

令和7年度 岡山大学第4期中期目標・中期計画
「教育に関する目標を達成するための措置」に関する外部評価報告書

1. 総 評

令和7年度外部評価委員会で行われた令和6年度実施状況説明と質疑により、第4期中期目標・中期計画の達成に向け、教育改革が年度を重ねる中で具体化し、着実に進行していることを把握できた。新執行部(令和5年度から)のもと、教学マネジメント体制改変を急ピッチで進め、組織体としてほぼ完成させたことを高く評価したい。教学マネジメント体制の整備を受け、中期目標の達成に向けた各施策が適宜捗っていることも報告から窺えた。とくに、3ポリシー、カリキュラム・マップ、カリキュラム・ツリーの公表、「知の探研」に代表される全学共通科目の準備、大学院共通科目の第1期生の修了時アンケートの実施など、教育改革に鋭意取り組んでいる様子が伝わってきた。

今後は、令和6年度までの取組を踏まえ、それぞれの実施過程や成果のモニタリングと改善を継続的に行い、PDCA サイクルを動的に機能させることで、教学マネジメント体制を実質的に恒常化していくことが肝要である。いうまでもなく、これらの作業は制度・組織の新設や改変よりも負荷が高いが、教育改革実現には不可欠である。教育改革の伸長に合わせて、内容の充実を含む改善の過程を継続し、成果を可視化し、教学マネジメントサイクルを着実に回し続けていることが令和7年度以降は重要となる。

報告会と質疑の各項目について述べる。なお、詳細なコメントは2～5節(後述)に譲る。

【教学マネジメント】

まず、部局長とのインフォーマルな意見交換の場であった「部局長と教学担当理事との懇談会」を発展的に「教学企画室会議」へ統合して開催することにより、部局とのより緊密な教学改革を推進できるようになったことは、教学マネジメント体制の恒常化に向けて大きな価値を持つ。授業評価アンケートの見直しに着手したことは、検証システムの構築に向けて重要な一歩を踏み出したこととして高く評価できる。

つぎに、学部3ポリシーの公表により、大学全体、大学院、学部のすべての3ポリシーの公表が完了したことは、入学者受入れの方針の見直しに関わる大きな成果である。さらに、膨大な作業を要したであろう、カリキュラム・マップ及びカリキュラム・ツリーが公開されたことも高く評価したい。また、「教育推進機構高等学校等との教育連携推進会議」を設置したこと、入学前教育の実施が全学に拡がりつつあることもまた高く評価できる。

【学士課程教育】

Target2025 に向け、周到な準備がなされていることは評価できる。新カリキュラム科目の編成、学士課程教育運営委員会を筆頭とする管理運営体制の構築、教授能力開発に資する全学FD の開催、改革の成果検証アンケート、新規開設科目「知の探研」のための細やかな準備(「知の探研7か条」の作成・教材化、試行授業の実施、授業担当者向けガイドブック作成・FD 実施な

ど)、英語学習ツリーの作成など、令和6年度に達成されたことは今後 PDCA サイクルを回すための重要な起点となるであろう。

【大学院教育】

大学院共通科目が、当初設計から適宜改変を経ながら、全学に浸透していていることは望ましい展開である。全受講生に実施した「大学院(修士・博士前期課程)2年次在学者対象大学院教育に関するアンケート」で6割の学生から好評を得ていることは喜ばしいことであるが、これから蓄積されるデータをもとにブラッシュアップしていくことが不可欠であろう。検討が始まった認定教授補助者(CAA)制度は、新設学部科目「知の探研」と連動した興味深い取組であり、今後の展開に期待したい。学生の学習過程の可視化については、プラットフォームの変更もあり、活動が始まったばかりであり、系統的なデータの蓄積、その解析、フィードバックなど今後の展開を待ちたい。さらに、「大学院(博士・博士後期課程)2年修了時大学院教育に関するアンケート」に加え、「在學生と上席副学長との懇談会」を実施し、教育の内部質保証に取り組んでいる姿が窺え、評価できる。

【その他】

報告資料「年度計画自己評価に基づく達成度評価」及び「年度計画自己評価書」においていくつかの項目で低い評価をしていることは、今後は注意すべきであることを指摘しておく。進捗状況の判断は、計画の特性や計画当初には想定できなかった課題の出現などを加味して行うべきである。たとえば、遅れている準備が完了すれば一挙に成果が上がることを期待できるものを、積み上げ式に成果が見えないという理由で低評価にする必要はない。さらに、成果が十分上がっていないとしても、計画遂行過程をよく吟味し、課題の残る点、課題が残った理由、遅れを取り戻す方策と予定を合理的に説明し、その上で低くない評価を下す方がよい。